

極東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國其他

對

荒木貞夫其他

宣誓供述書

供述者

中島 虎吉

自分儀我國ニ行ハルル方式ニ從ヒ元ツ別紙ノ通り宣誓ヲ爲シタル上次ノ
如ク供述致シマス

一私は中島虎吉であります。東京都世田谷區上北澤町二丁目八三八番地に
住んで居ます。

二私は元陸軍中將にて昨年三月迄梨本宮附別當を勤めて居りました。

三私と荒木大將との關係は大將が昭和四年より昭和六年（一九二九—一九三一）
に亘り熊本第六師團長當時私は第六師團司令部附少將として同一場所に
勤務致し其後も東京に於て引續き親密を交際をなし又陸軍士官學校も同
じ「クラス」でありますので公私共大將の性格はよく知つて居る一人で
あります。

四私は六師團在勤中主として在郷軍人關係學校關係及び地方關係の職務
を擔任して居りましたので、大將が師團長として是等方面に對する考へ
や行ひや軍隊の内務教育のやり方に就いては善く知つて居ます。

五大將の軍隊教育の主義方針の根本は軍隊をして天皇の御徳を輝やかしめ
るといふ一言に盡さるのであります。假りにも征服のための様を氣持を
持つてはならぬ故に日本軍は天皇の御徳を能く奉へねばならぬ事を教
育すべきである。と凡る機會を捉じて常に軍隊學校及び地方に呼びかけて居り
そして軍隊で之を教へ習慣はつけられました。

六大將は大學高等尋常學校及中等學校に勤める配屬將校に對しても學生主
徒の教育は戦争訓練ではなく前項にあるような精神を基として青年のも

つて生れた素質を向上し社習の御役に立つべき良民を作るように導かねばならぬ、強めて云へば規則正しく健全なる活潑明朗なる青年を養成することである」と示して居りました。特に大將の配屬將校に對する訓示の特色は配屬將校は學校長以下學校職員に對し「日本の軍隊は決してミリタリズムと云はれたり帝國主義と言はれたりした「プロシア」型の軍ではない。偏に仁愛なる天皇の御心を体して居るのである」といふ事のはつきりした認識を與へ日本軍隊の眞の姿を理解させる事か、主なる使命であることを強く要求してゐる點にありました。尙配屬將校は自ら學校の規則を守り之を實踐して手本を示し校長及び職員の立場を善く認めて協同せよと指示して居りました。

隨て配屬將校の人選に當りても曰「我が勝つた強氣の人よりも寧ろ優しく協調心に富んだ人を推薦するよう」に常々私に命じて居りました。

七、大將は青年將校に對していつも我軍の軍隊は「プロシア」式ではいけない。眞に陛下の御心を体する皇軍でなければならぬ。其の爲には軍人は部下からも地方民からも親愛され、尊敬される人格者でなければならぬ。亂暴者ではないけない。血氣にはやつてはならぬといふ點にありました。

八、私の最も大きな思出の一つは大將も私も第六師團を去つた昭和六年（一

九三一一十一月熊本地方で行はれた特別大演習の四日間を共に陪觀した時のことである。其の頃大將は教育總監部本部長の職にあつて暫らく會ふ機會もなかつたが演習中親しく大將の感想談や考へを聽く機會に恵れました。今尙強く記憶に存するのは「軍隊は勝つて敵に怨まれず、止つて居民に慕はれよ」の言葉であります。現は是れは大將が第六師團長當時もこの教育に力を入れて居たのであります。現に演習地の田畑に軍隊が通過して荒されるのを指示しながら我々が第六師團であれだけの教育をしたのに尙實行が出来ぬかと歎き皇軍としての本質發揮に一寸も心を放さなかつた事を知つて強く心を打たれたのであります。

其の年の十二月大將は陸軍大臣に就任されましたので東京に移住して居た私も屢々訪ねてお話を聽きました。就任當時大將は滿洲事變の處理に深く心を痛め是れはグズグズして居れば日支の全面衝突になつて仕舞ふ恐れがあるし國際聯盟では、支那側の一方的宣傳のため時局の真相を認識しきらなかつたから兎に角自分としては一日も早く出来るだけ小範圍で戦亂を終熄せしめて日支全面衝突の危険を防止し其の上で聯盟始め列國にも認識して貰ふつもりだと云ふて居られ苦衷を語られました。

一〇 國際聯盟脱退當時大將に會つた時の話に關しては脱退せぬ事に決めて居たのに「ジュネーヴ」に於ける會議の成行上脱退せぬ事に決めて居た

政治は六ヶ敷いものであるとこぼして居られました。

一 昭和八年（一九三三年）五月塘沽協定が出来上つた直後私は官邸に御訪ねしたところ大將は頗る上機嫌で是非食事をして行けと勧められて食事を共にし乍ら云はれるのに君にもいろいろ御心配を願つたが御蔭で満洲の騒亂終止を心配して居たが、之れで兎に角血醒い事はなくなつたとしみじみ語られました。

一 昭和九年（一九三四年）一月大將は肺炎に罹り重感となり遂に陸軍大臣を退かれて熱海の療養所で静養中を見舞ふた時大將の云はれるのに實に重大な時に病氣をして申辭がなかつた、今日自分としては国際聯盟脱退後列國との協調を回復するため極東において平和會議を提唱する事が肝要であると信ずるか、自分のあの時の健康ではこの難題を提げて議會の他に活動する事か出来なかつたので、遂に退任せざるを得なかつたが、自分の考へは書面を以て齋藤總理大臣及閣僚に建言して置いたし、陸軍にては自分の後繼者林大將が責任を以て努力して呉れる事になつて居るから必ず實現が出来るものと信じてゐるとの希望を以て話をされました。

一 三 其の後病氣回復し歸京せられた後私は御訪ねした際の大將は御機嫌が悪くて自分があるだけ總理大臣や閣僚に頼んで置いたのに少しも努力の

跡がない。つまりない問題のみに終始して東洋平和のための世界的諒解が少しも企てられて居ない實に残念であると思つて居られました。

一四二、二六事件の後大將は現役を退かれましたか。副を擧げて返還を状をして居られましたか。

一五 文部大臣になられたので永田町の官邸に御見の爲御伺ひしましたら大將は「近衛總理は自分に今一度滿洲事變同様に火消役を勤めて貰ひ度いこと云はれるが、文部大臣は陸軍大臣と違つて眞の行動に關して何の力もななく困つてゐる。文部大臣では結局何も出來ないだらう」と心から心配して居られました。

一六 大將は其の後近衛さんから參議になつて呉れとの交渉がなつたか自分の意見を聴かず三國同盟と大政翼賛會とを決めてしまつた以上もう假令參議になつて見たところで何の御奉公も出來ないと云ふて御断りしたと聞して居られました。

一七 大將は國を遣へた自由主義や共產主義や空想主義にかぶれる事を戒めて日本本來の道（其の根本は皇室の仁愛の御精神）を完全に反省實行すれば世界の平和に眞獻する事か出來ると云ふ信念を持つて居られませんでした。そこで他國や他民族を征服したり合併したりする事にも反對して居られ

ました。其の一例として日本の朝鮮併合には反對の意見で其當時露西亞に居られましたか大將をよく知つて居られた元豐の宇都宮將軍にも反對論を發せられたことかあつたとよく話されて居りました。多年の所體とか民族精神とかは尊重し合つてお互に侵すことのないようにせねばならぬ、殊に歴史に取つた事のないアングロ・サクソンなどはどんな事があつても戦争にならぬよう努力せねばならぬと改へられた事があります。一八六八年戦争中久里濱のヘルリの記念碑を撤去せよとの論が喧しい折に御伺ひして討論統一の爲にはこんな事も已むを得ないでせうかと申上げますと大將は聞き直つて君までそんな事を云ふか、日本の強みは恩を知り、恩に報ある事である。日本が開國以來精密に云へば種々の議論はあるが、アメリカより相當の恩恵を受けた事は否定する事は出来ない、偶々不幸にして今次戦争になつたからとて一度それと感じた恩を忘れるようではどとに日本の強みがあるか同様の問題であるが陸軍大臣時代ランカシアの綿業歴史とシヤム米輸入反對の議論が喧ましかつた時大臣は数人の手との雄談に於て自分か苦しい時代に助けてくれた恩人に對し自分の都合かよくなつたからと云つて忘恩既を態度に出る事は道徳上許されない處であると強く意見を述べられた事を今も記憶致して居ります。

昭和二十二年（一九四七年）八月二十三日 於

東京都世田谷區上北澤町二丁目八三八番地

供 述 者 中 島 亮 吉

右ハ當立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタルコトヲ證明シマス

同 日 於

立 會 人 遠 岡 高 明

宣
誓
書

良心ニ從ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ隠秘加セ又何事ヲモ附加セザルコトヲ誓フ

(署名捺印)

中
島
虎
吉